

科目の内容（シラバス）

②授業科目名	③必修／選択の別	④単位数	⑤含む必須の教育内容番号	⑥担当教員名	⑦実施形態
日本語教授法	必修	2	21・22・23・25・27・ 29・30・34・35・36・ 39・40・41・42・43・ 44・45・49・50	中石 ゆうこ	対面
⑧授業のテーマ及び到達目標	<p>【授業の到達目標】</p> <p>【知識・技能】</p> <p>①外国語（第二言語）としての日本語教授法、シラバスの種類と特徴を知り、適切なものを選んで使用できる。</p> <p>②日本語授業の教案（指導案）を必要項目を押さえて作成できる。</p> <p>【思考・判断・表現】</p> <p>③外国語として日本語を教えることを意識しながら授業を客観的に分析して、教え方を工夫することができる。</p> <p>【主体性・協働性】</p> <p>④授業の自己点検・相互評価を通して授業の改善点を見つけて議論に積極的に参加できる。</p> <p>【カリキュラム上の位置づけ】</p> <p>H28年度以前の入学生 →国際文化学科・学科専門科目>コミュニケーション</p> <p>H29年度からR元年度の入学生 →国際文化学科・学科専門科目>関連科目</p> <p>R2年度以降の入学生 →地域文化コースのコース専門科目>文化継承コアユニットII</p> <p>「日本語教育学」を受講していること前提とする。</p>				
⑨授業の概要	<p>① 学習者のニーズやレベルに合わせて、どんな教授法、シラバスが適切なのか考える。 単なる知識の伝達ではなく、コミュニケーション能力を育成する内容になっているだろうか？（コミュニケーション能力を育成）</p> <p>② 日本語授業の教案、教材を作成する。 教材としてICTをどのように用いることができるか？著作権は守られているか？（ICTの効果的な活用方法、情報資源の扱い方）</p> <p>③ 学習者の日本語レベルに合わせて、日本語（文型、語彙、表記）を調整して用いる演習をする。 授業ではどんな誤用が出るだろうか？どんなフィードバックが適切だろうか？（誤用の分析及びフィードバック方法）</p> <p>④ 学習者の目線から見て、授業でどんな質問が出るか、授業はどんなふうに見えるか考える。 学習者はどんな気持ちで日本語の授業を受けているだろうか？別の文化、言語を持つ学習者からは日本語の授業はどう見えるだろうか？（異文化理解能力や、異文化接触場面におけるコミュニケーション能力）</p>				
⑩授業計画					
授業回等	各回の授業内容				各回に含む必須の教育内容番号
1	オリエンテーション 外国語の初級授業を直接法で受けてみよう（インドネシア語）				21・22・23・25・27
2	授業の設計（1）指導内容の検討 学習者のプロフィールから日本語教育カリキュラム、シラバスの選定				21・22・23・25・27
3	授業の設計（3）指導内容の検討 日本語教材分析、授業目標の選定、教案づくり				29・30・34・35・36・39・ 40・41・42・43・44・45・ 49・50
4	授業の設計（4）指導内容の検討 教案づくり、教材づくり				29・30・34・35・36・39・ 40・41・42・43・44・45・ 49・50

5	模擬授業（1）	29・30・34・35・36・39・40・41・42・43・44・45・49・50
6	模擬授業（2）	29・30・34・35・36・39・40・41・42・43・44・45・49・50
7	模擬授業（3）	29・30・34・35・36・39・40・41・42・43・44・45・49・50
8	模擬授業（4）	29・30・34・35・36・39・40・41・42・43・44・45・49・50
9	模擬授業（5）	29・30・34・35・36・39・40・41・42・43・44・45・49・50
10	模擬授業（6）	29・30・34・35・36・39・40・41・42・43・44・45・49・50
11	模擬授業（7）	29・30・34・35・36・39・40・41・42・43・44・45・49・50
12	模擬授業（8）	29・30・34・35・36・39・40・41・42・43・44・45・49・50
13	模擬授業（9）	29・30・34・35・36・39・40・41・42・43・44・45・49・50
14	模擬授業（10）	29・30・34・35・36・39・40・41・42・43・44・45・49・50
15	ふりかえり（コミュニケーションの真正性とは）	29・30・34・35・36・39・40・41・42・43・44・45・49・50
16	最終課題（もう一度教案を作ってみよう、どんな工夫ができるだろうか）	29・30・34・35・36・39・40・41・42・43・44・45・49・50

⑪使用テキスト	森篤嗣編（2019）『超基礎日本語教育』くろしお出版（科目「日本語教育学」の教科書と共通）
⑫参考書・参考資料等	国際交流基金「JF日本語教育スタンダード」、「みんなのCan-Doサイト」、文化庁「日本語教育コンテンツ共有システム」、「いろどり」、文部科学省「つながるひろがるにほんごでの暮らし」、スリーエーネットワーク『みんなの日本語初級Ⅰ 本冊』、『みんなの日本語初級Ⅰ 第2版翻訳・文法解説 英語版』、庵功雄監修『にほんごこれだけ1』ココ出版、嶋田和子監修『できる日本語初級本冊』アルク、市川保子(2005)『初級日本語文法と教え方のポイント』スリーエーネットワーク、松岡弘監修（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワークなど
⑬同時双方向性の確保 (通信で実施する科目のみ)	
⑭学修課程の管理方法 (通信で実施する科目のみ)	
⑮学生等に対する評価 (評価基準・評価方法等)	教案・模擬授業でのパフォーマンス(30%)（到達目標①②③） ふりかえりでの議論への参加度・ふりかえりレポート(20%)（到達目標④） 模擬授業の見学レポート(10%)（到達目標④） 期末レポート(40%)（到達目標①②③④） ※いずれの課題も提出が遅れた場合は1/2に減点する。